

令和5年度 佐世保市学力調査及び長崎県学力調査【小学校】

<佐世保市の結果・改善策等について>

I 佐世保市学力調査

1 調査対象・人数

(国語・算数) 小学校及び義務教育学校前期課程 第4学年・・・2,095名

2 教科別領域別結果

教科	国 語							算 数				
	言葉の特徴や使い方	情報の扱い方	我が国の言語文化	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	全体	数と計算	図形	測定	データの活用	全体
市平均正答率	74.4	43.6	81.5	81.1	52.2	60.6	67.8	69.4	74.4	62.0	83.5	69.3
全国平均正答率	77.7	49.9	81.5	82.6	52.3	66.5	70.8	72.2	74.6	64.7	86.0	71.9
全国比達成率%	95.8	87.4	100.0	98.2	99.8	91.1	95.8	96.1	99.7	95.8	97.1	96.4

3 課題と分析及び改善策 (○：成果 ◎：改善傾向 ▲：課題 ■：継続課題)

教科	課 題 ※【問題番号】	平均正答率		改 善 策 (例)
		市	国 自校	
国 語	○ 相手に伝わるように、自分の考えを、理由を挙げながら話している ○ 自分の考えを明確にして文章を書いている ○ 自分の考えとそれを支える理由や事例を明確にして文章を書いている			
	▲ ローマ字で表されたものを正しく読んでいる【3-(3)】	63.1 72.5		・ローマ字の読み方・書き方について授業で確実に理解させ、練習を行う。定期的に復習プリント等を活用し、確かな定着を図る。また、児童用端末を活用して、楽しみながらタイピングをさせる中で、ローマ字の書き方について確認する機会を設ける。
	▲ 登場人物の気持ちの変化について、具体的に想像している。【4-(2)】	43.1 51.0		・「読むこと」において、「場面の移り変わりと結び付けて」考えさせる発問を行う。単元の学びの中で、想像したことの根拠を本文の叙述を基に説明させる場面を意図的に設定する。
	■ 叙述をもとに段落の内容を捉えている。【5(2)】	70.2 65.1		・普段の授業から本時や単元のめあてと関連させて、読む目的意識を児童に持たせる。教科書を読む際に読み取る視点を持たせることで、求められている情報を自ら選択・判断させる。自らの考えを持たせたうえで、対話的な活動等において考えの根拠を示しながら話し合いを行うことで、一人一人の考えが深まるような場面を意図的に仕組む。
	▲ 情報と情報との関係について理解し、中心となる語や分を見つけて要約している。【5-(3)】	45.7 54.0		
	▲ 目的を意識し、集めた材料を比較したり、分類したりして、伝えたいことを明確にしている。【6-(1)】	58.1 63.8		・「調べたことを文章に書く」活動を行う際は、児童自身が最も伝えたいこと、その理由を明確にさせることがまずは大切である。そのうえで、互いの書いた文章について読み合い、「考えが伝わる文章になっているか」という視点で感想や意見を交流させる活動を設定する。
算 数	○ 円の直径について理解している ○ 正三角形を作図することができる ○ ある時刻から一定時間が経過する前の時刻を求めることができる			
	▲ 分数の数直線上での表し方について理解している。【3-A(6)ア(ア)】	60.8 68.4		・分数の学習の際には、常に何を「1」と捉えているのかを意識させ、1を等分した1つ分(単位分数)の考え方を用いて、全体や部分の大きさを単位分数の幾つ分で表現することを意識させる。
	▲ □を使った文章問題(乗法の場面)を表した図の構造をとらえている。【3-A(7)イ(ア)】	63.9 71.2		・数量や数量の関係に着目して、問題文を読み取り、図に表し、わからない数がどこの部分になるのかを話し合う活動を設ける。また、図によってあらわした数量関係を読み取り、式にしたり、式から図に表すなどの数学的活動を適宜取り入れることで、式と図を関連付けることができるようにする。
	▲ m(ミリ)が1000倍すると、m(ミリ)が取れることを理解している。【3-C(1)イ(ア)】	34.5 43.5		・長さやかさ、重さの単位について整理してまとめる作業をとおして、それぞれの単位に共通する関係を児童が見つかる活動を設ける。その中でメートル法の接頭語m、c、kの意を理解させ、さらに身の回りの様々なものの量などを単位をもとに具体的に想像させることで、単位に関する理解を深めさせる。

II 長崎県学力調査（国語・算数）

1 調査対象・人数

（国語・算数）小学校及び義務教育学校前期課程 第5学年・・・2,085名

2 教科別領域別結果

教科	国語					算数					
	知識及び技能	話す聞く	書く	読む	全体	数と計算	図形	測定	変化と関係	データの活用	全体
市平均正答率	76.9	57.9	59.5	68.1	69.0	75.6	53.5	79.1	71.9	67.8	69.8
県平均正答率	77.4	58.3	59.8	68.0	69.4	75.9	54.8	79.6	67.8	67.7	69.7
県比達成率%	99.4	99.3	99.5	100.1	99.4	99.6	99.4	99.4	106.0	100.1	100.1

3 課題と改善策（○：成果 ◎：改善傾向 ▲：課題 ■：継続課題）

教科	課題 ※【問題番号】	平均正答率		改善策（例）
		市	県 自校	
国語	○ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら話す ○ 登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像する ○ ことわざの意味を知り、正しく使う			
	話の中心や話す場面を意識して、話し方を工夫する【1三】	66.1 68.2		・「話すこと・聞くこと」の単元の導入において、相手意識・目的意識を明確にした言語活動を設定するとともに、ゴールとなる児童の姿を単元のめあてとして設定する。学習過程において単元のめあてを常に意識させ、学びの視点・目的を明確にして対話活動等に取り組みさせる。
	文の中における主語と述語の関係性を捉える【2一（1）】	70.7 71.8		・「～は、～が」にあたる言葉が主語、「～だ、～する、…」にあたる言葉が述語という形式的な指導のみで終わらず、主語と述語の関係について、述語は文の結論を表す役割を担っており、主語はその主体になることを確実に理解させる。そのうえで、低学年から主語と述語の関係について指導を積み上げていく。
	登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述をもとに捉える【2二（1）】	74.4 75.3		・教科書を読む際には、読みの視点を与えてから読ませる。自分の考えを説明する際に、叙述を根拠として発表するような対話活動や場面を意図的に設定する。また、児童の発言に対して、一問一答で終わらず、なぜそう考えたのか根拠を問うことで、考えを深めさせる。
	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく書く【3三】 ※数値は2項目の平均	63.7 64.9		・漢字の音・訓の関係について理解させる。反復練習では、「新しい漢字を覚える」「苦手なものを練習する」「覚えているか確認する」など、一人一人の課題に応じ、目的をもって取り組ませる。また、学習した漢字は必ず使わせることで、学年配当漢字を確実に身に付けさせる。
算数	○ 整数の計算に関して、分配法則を活用して計算を簡単に行う工夫をすることができる ○ 示された場面において、目的に応じてデータを読み取り記述できる ○ 数量関係に着目し、□と○を用いて、その関係を式に表すことができる			
	示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察できる【1（3）】	83 85.3		・四捨五入などのおよその数による表し方の理解を確実に行った後、目的に合った数の処理について、生活場面の中で条件を満たすために、概数による計算にする活動を仕組み、根拠をもとに話し合わせることで考えを深めさせる。
	分数が単位分数の幾つ分かで表すことができることを理解している。【1（4）ア】	62.5 64.8		・図や数直線などを使い、1を等分した1つ分という単位分数の考え方を視覚的にとらえることができるようにし、さらに、全体が1より大きい分数においても、単位分数のいくつ分で表すことができることを理解させる。
数量の関係を図を用いて表現することができる。【2（2）①】	73.5 75.5		・数量の関係を考える際は、対象の数の大小をもとに、何倍になりそうかという見通しを持たせるようにする。さらに、児童が数量の関係を図や式で表す活動を行い、基準量を1としたときに対象物が幾つ分に当たるかという「倍」の意味について小数でも成り立つことを確実に身に付けさせる。	

Ⅲ 長崎県学力調査（理科）

1 調査対象・人数

（理科）小学校及び義務教育学校前期課程 第6学年・・・2, 112名

2 教科別領域別結果

教科	理科				
	エネルギー	粒子	生命	地球	全体
市平均正答率	60.1	62.3	60.0	73.9	63.9
県平均正答率	60.9	63.6	60.7	74.2	64.7
県比達成率%	98.7	98.0	98.8	99.6	98.8

3 課題と改善策（○：成果 ◎：改善傾向 ▲：課題 ■：継続課題）

教科	課題 ※【問題番号】	平均正答率	改善策（例）
		市	
		県	
		自校	
理科	○ 実験結果を基にして、ツルレイシの成長の違いである条件について分析解釈することができる ○ 水たまりのでき方について、観察した記録を基にして、考察することができる ○ 洪水を防ぐ施設の共通点を見いだすことができる ○ 容器に閉じ込めた空気を押し縮めたときの手ごたえの違いについて分析解釈することができる		
	▲ ミツバチがおしべの花粉をめしべに運んで受粉させることを理解している【1（5）】	51.5 53.5	・ 問題解決の過程において、個々が思考した内容を学習シートなどに記入して表現する場を設ける（課題の設定、仮設の設定、検証方法の立案、結果の処理など）。その際、なるべく既習用語を使って表現する習慣をつける。また、個人で表現した後に、隣同士で意見交換する活動などを通して表現力を高める場を設定する。
	▲ 実験結果を基にして、「分かること」「分からないこと」について分析・解釈することができる【2（3）】	72.4 74.5	・ 結果の「読み取り」については、記述されている内容から「分かること」を整理して表現する活動を設ける。その際、文章表現だけでなく、【2－（2）】のように図で表現させることも有効である。実験・観察の「考察」を書かせる活動でも、「根拠」となるのは結果（から分かること）であることを普段から意識させる。
	▲ 提示された事象から、電磁石の極と方位磁針の向きを関係付けて考えることができる【3（1）】	37.3 39.7	・ まず、電磁石を棒磁石に置き換えて両極の性質を説明できるようにする（※同じ極同士は反発し、異なる極同士は引き合う）。次に、電磁石も磁石と同じ性質を持つことを確認した上で、どちらがN・S極になるのか考えさせる活動を設ける。その際、根拠として既習事項である方位磁石を使って解釈できているか確認する。
	▲ 実験結果を基にして、空気を温めると体積はどうなるのかについて分析・解釈することができる【4（1）】	47.0 49.3	・ 実験・観察の「考察」を書かせる際に、「～は～だ（結論）と考えられる。その理由は～（結果）だからである。」などのように、定型文を示して「結果」を根拠として「結論」を書く習慣をつける。

IV 考察

【国語】

- 「書くこと」においては、県学力調査では県平均と同等、市学力調査でも全国平均と同等の結果が出ている。各学校において「書くこと」を意識した授業改善が進んでおり、授業の中で効果的に書く活動が位置付けられていることの成果が表れている。今後も引き続き書く活動を計画的に位置付けていく。
- 「読むこと」においては、県学力調査では県平均と同等であったが、市学力調査では県平均を8.9ポイント下回った。国語科の学習は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動をとおして資質・能力の育成を目指すものである。したがって、言語活動が形式的な活動に終わることがないように、単元の目標を授業者が意識し、児童と単元のゴールとなる姿を共有したうえで学習を進めることが重要である。登場人物の心情を想像させたり、気持ちの変化を考えさせたりする際には、ただの感想や児童と教師の一問一答にならないように注意したい。児童に「なぜそう思ったのか」を問い返すことで叙述に根拠を求めたり、グループ活動など対話的な活動を行う際にも、叙述を根拠に語るという話し合いの視点を与えることで、新たな考えに気づいたり、より考えが深まったりすることにつながる。
- 「情報の扱い方」については、全国比より-12.6ポイントで特に課題が大きい。改善のためには、集めた情報を使って、何を伝えたいのかを、児童一人一人が明確に考えを持ったうえで活動することが大切である。伝えたいことによって中心となる語や文、選択する情報が変わる。したがって、単元の導入において、児童に学びの必然性、伝える相手や目的をしっかりと伝えさせようとして授業に臨むことが重要である。

【算数】

- 市学力調査においては、全国比達成率において、昨年度の97.8%から96.4%へと達成率が低下した。県学力調査においては昨年度からわずかに低下したものの、県比達成率100.1%で一定の成果が表れてきているといえる。一方で数量関係を図を用いて表現するや、分数の表し方、小数倍など、考える基準が何かということへの定着が薄い現状がある。課題改善に向け、次の2点を意識したい。
 - ① 小数や分数の表し方において、0.1や10分の1などの単位小数、単位分数をもとにした考え方を働かせ、計算を行うようにする。また、もとめる量がなにを何等分した幾つ分なのかについて、具体物や図等を活用して理解させる。
 - ② 問題場面の数量関係を、図等で整理する活動を低学年から取り入れ、全体と部分や、基準量・比較量・割合（倍）を視覚的に捉えることができるようにするとともに、問題⇄図⇄式のような双方向からの取組を適宜取り入れることで、数量関係を理解させる。
- 学習において、身に付けるべき力を意識し、その力が身に付いた結果の子どもの姿を教師が意識し、その姿をゴールに「まとめ」を考える。そしてまとめにつながる「めあて」を立て、ゴールの姿に結び付く「活動」を組み立てるといった帰納的な授業づくりを行うこともひとつの手立てである。また、数や図形の概念理解を図る中で、図や言葉を用いて、身に付けるべき力を意識して書く活動を計画的に取り入れるように単元計画を工夫する。考えをまとめたり、他者の発想に触れるためには、ICTを効果的に活用することも必要である。自席にいて多くの共有された画面を確認することや、自分の過去のデジタル化された学習物を用いて、考えの再構築も可能となり、教師側も系統的な学習を行うために、関連単元の過去の児童の学習物を全員に共有し、学習を想起させるなど指導に活用ができる。

【理科】

- 与えられた語句を使って「記述」で答える問題が2問（【1-（5）】【4-（1）】）出題されており、本市はどちらも県平均を下回っている。自らの考えを表現することに抵抗がある児童が多いことが課題としてうかがえる。この課題を克服するためには、子どもたちが主体的に表現する場を設け、その表現を「認めて伸ばす」機会を意図的に仕組み、子どもたちに自信をつける必要がある。具体的には、導入の場面で、本時の「ねらい」に対応した「考えたくなる」課題（※これまでの知識や経験だけでは説明できない事象）を提示し、子どもたちの中に生じた疑問をそのまま「めあて」として「表現」させ、それぞれの表現方法を「認める」。また、その疑問に対して自分なりの「仮説」を「根拠」をもって表現し、隣同士ペアで説明し合うなどして自らの「表現をより良いものにしていく」などの探究的な活動を通して自信をつけていく方法が考えられる。このように、子どもたち自身が「本時の課題」を明確に捉えることができれば、これまで培った「理科の見方・考え方」を働かせながら思考し、表現力を身につけていくことができる。ただし、そのためには、子どもたちに捉えさせたい「本時の課題」を「教師自身が明確に」捉えて授業に臨むことが重要な条件となる。